

陸奥国分寺・尼寺創建期の窯跡を発見

仙台市教育委員会 平成 24 年 6 月 3 日 (日)



東日本大震災の影響で水が抜かれた与兵衛沼

(平成 24 年 4 月 19 日撮影)

[遺跡名] 与兵衛沼窯跡

[所在地] 仙台市宮城野区蟹沢 与兵衛沼公園内

[調査主体] 仙台市教育委員会

[調査担当] 仙台市教育委員会文化財課 整備活用係

[調査期間] 平成 24 年 5 月 8 日～6 月 5 日 (予定)

[面積] 約 2000 m²

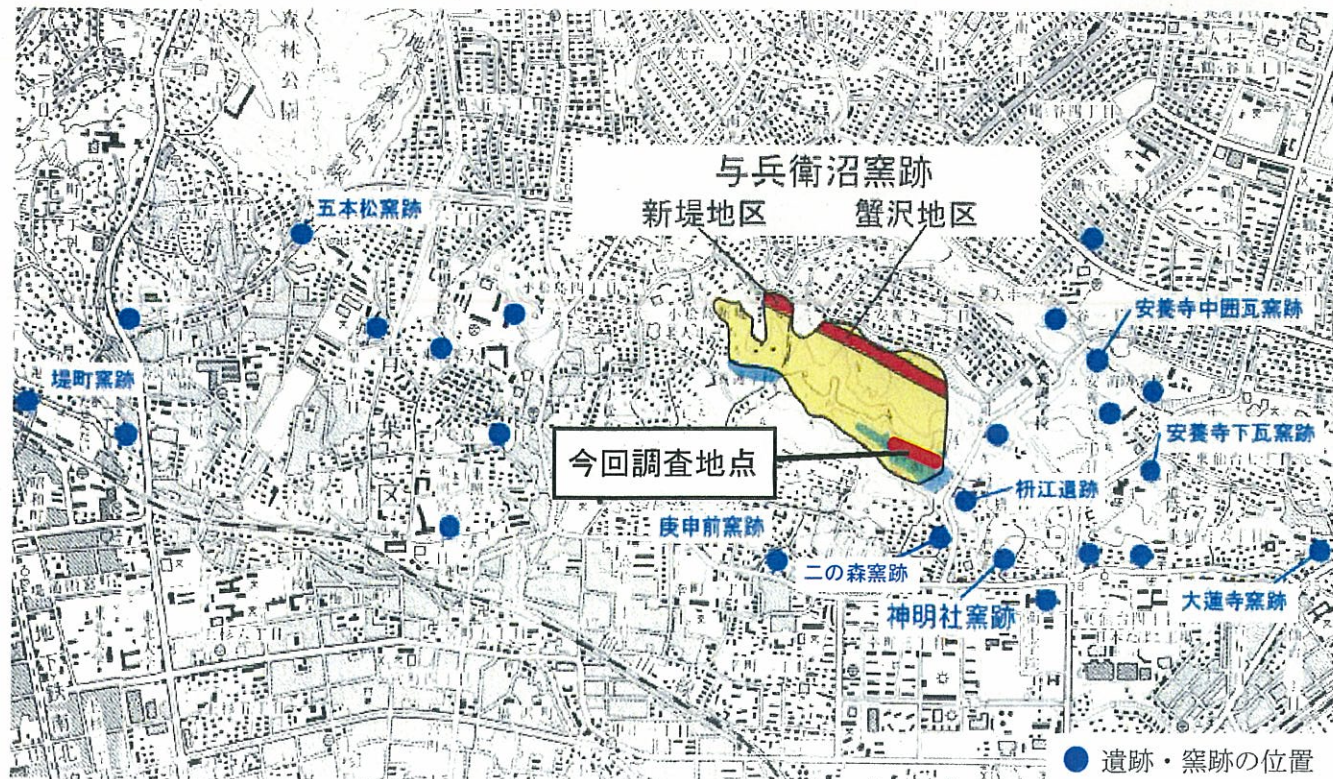
はじめに

与兵衛沼窯跡は、市街地の北方に広がる標高 30～100mの台原・小田原丘陵のほぼ中央、かつて農業用水池として使われていた与兵衛沼・新堤の北岸に位置しています。この丘陵一帯では、古くから古瓦が出土することが知られ、「台原・小田原窯跡群」と呼ばれています。

ここから出土した瓦類は、陸奥国府多賀城や陸奥国分寺・国分尼寺に供給されていたことが分かっています。

奈良・平安時代にはなかった「与兵衛沼」

与兵衛沼は、1671 (寛文 11) 年に仙台藩士・鈴木与兵衛が、水田の水不足を解消するために、自費で造った人工の沼です。第 4 代仙台藩主・伊達綱村が、その功を賞賛して「与兵衛堤」と名づけました(「宮城野の散歩手帖」より)。沼の水は、最近まで小田原・苦竹・燕沢・新田・高砂地区の水田の用水に使用されていましたが、現在は全く使われなくなりました。



与兵衛沼窯跡と周辺の遺跡の位置

(1) 瓦工房と考えられる遺構

瓦を製作していた工房と考えられる竪穴遺構を 1 軒発見しました。大きさは、東西約 7m、南北 5m 以上で、遺構の北半部が残っており、南半部は、沼の開削や沼の水の侵食によって削り取られたと考えられます。竪穴遺構の床の中央部には、玉縁(有段)のある丸瓦を南北方向に敷き並べた施設があり、工房の排水施設と推測されます。

竪穴遺構からは、奈良時代(8世紀中頃)の土師器(素焼きの土器)や須恵器(窯の中で焼いた土器)、刀子(小刀の一種)と考えられる金属製品が出土しました。

これまでの調査では、折江遺跡や二の森窯跡で、窯に近接した位置に同様の竪穴遺構が発見されています。



1号竪穴遺構(工房跡)

(2) 屋根瓦を生産した窯跡

窯跡を 14 基発見しました。これらの窯跡のうち、特に 4 基の窯跡の状態が良いことが分かりました。窯跡の中からは、多数の丸瓦・平瓦が出土し、灰原(窯の中にたまった炭や灰、焼き損じた瓦片などを掻きだした場所)から、「偏行唐草文」という文様の軒平瓦の破片が出土しました。この文様の軒平瓦は、陸奥国分寺(若林区木ノ下)・尼寺(宮城野区宮千代ほか)、陸奥国府多賀城(多賀城市)などでも出土しており、奈良時代(8世紀中頃)のものと考えられます。唐草文の細部の特徴から、陸奥国分尼寺跡から多く出土する種類であると考えられます。

(3) まとめ

今回の調査では、窯が発見された位置や瓦、土器の出土状況から、さらに沼の中心近くまで古代の窯跡が造られた可能性があります。標高の低い現在の与兵衛沼付近から陸奥国分寺・尼寺の創建期(8世紀中頃)の窯が発見され、丘陵の頂部にある新堤地区で貞観 11 (869) 年の陸奥国大地震で被害を受けた国府多賀城を復興するために造られた窯跡が発見されていることから、長期に渡って窯が造られ、丘陵全体に分布している可能性が考えられます。

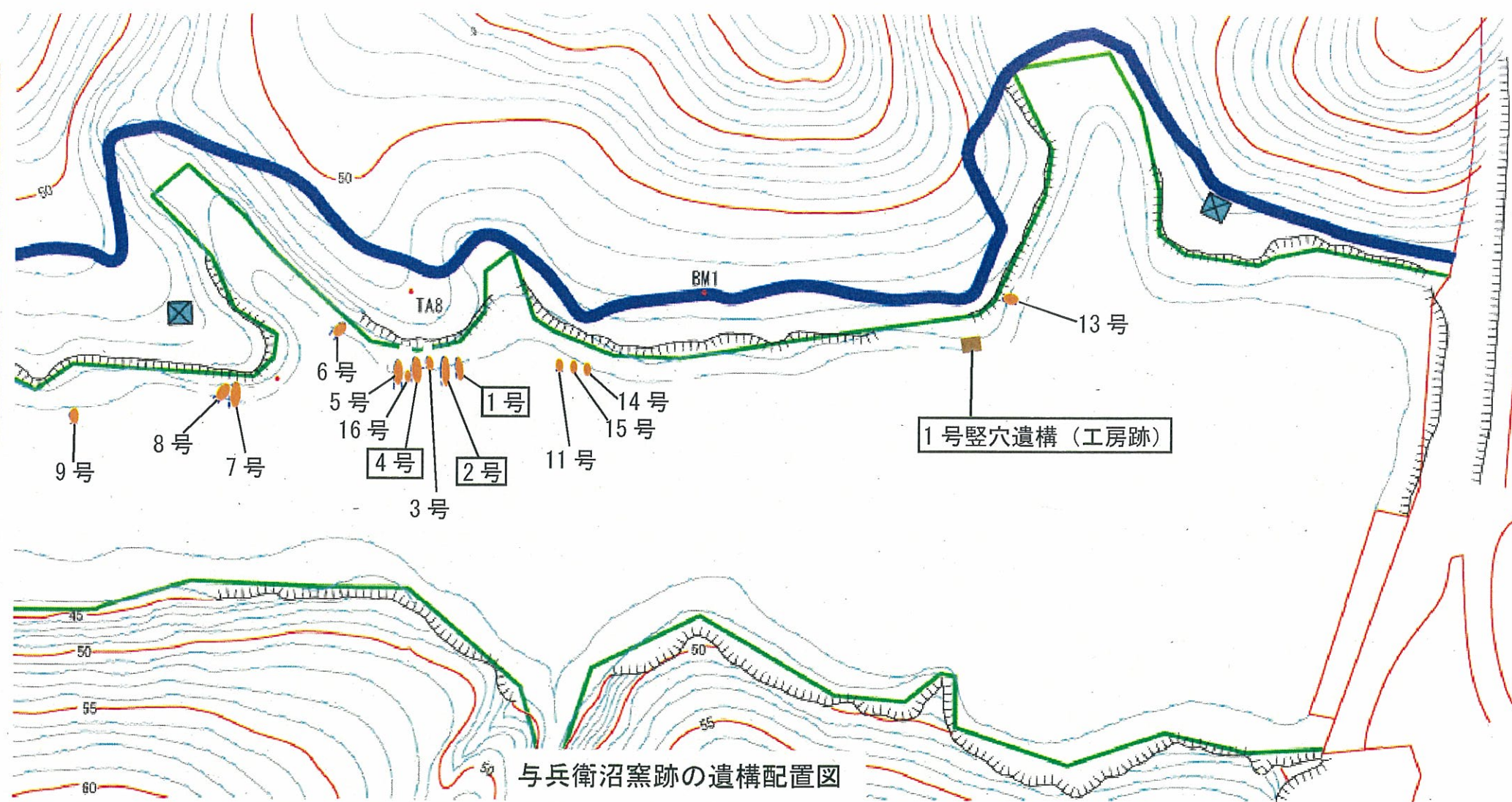
今後、古代陸奥国の役所や寺院に用いられた瓦や土器の生産の様子を明らかにするために詳細な調査や保存が必要と考えられます。



2号窯跡床面 遺物出土状況



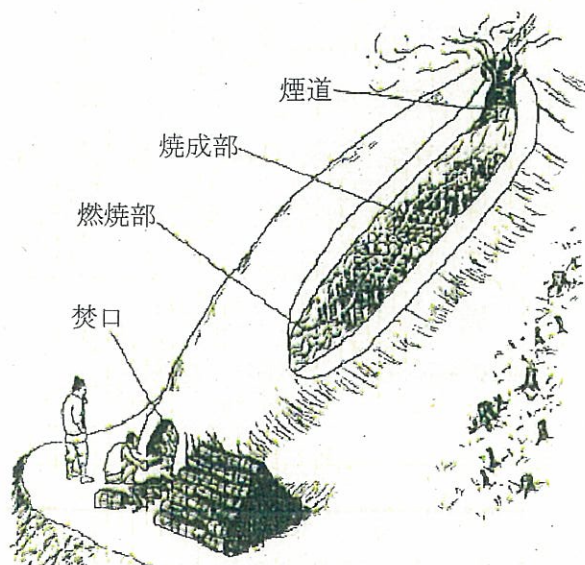
1号窯跡床面 検出状況



4号窯跡床面 遺物出土状況



5号窯跡灰原 須恵器・瓦出土状況



窯の施設の名称と製品を焼くイメージ図
(「図解 技術の考古学」より)



軒平瓦 (1号窯跡灰原から出土)



軒平瓦 (4号窯跡灰原から出土)



軒平瓦 (4号窯跡灰原から出土)

